

泰阜村の松島貞治村長

写真は『ガバナンス』2015年1月号である。日本創生会議が公表した試算は、消滅する可能性が高いとされた人口1万人未満の自治体の大半を占める町村に大きな衝撃をあたえた。「果たして町村はこのまま消えてしまうのだろうか。そのレゾナードール（存在意義）を含めて考えてみたい」と特集が組まれた。

町村が描く多様な自治のカタチ②として、長野県泰阜村の松島貞治村長が「まさに自立の地域、自立の心をめざして」を寄稿している。村長らしい示唆に富む指摘が多い。「戦後生まれの村民は、人口が減っていくことしか経験していない。では、人口が多かった当時が村にとって最適で、現在の村はだめなのか。そんなことはなく、村の評価は、その時代に生きている村民の意識や生き方で判断されるはず。泰阜村は、日本創生会議の予測で、なぜか若年女性の減少率が39%で消滅自治体に属していないが、近隣で泰阜よりはるかに恵まれ、力がある村が消滅自治体と報道され、現場にいと、この予測は地震の予知より確率が低いのでは、と思う。」

村の取り組みを二つ紹介する。一つは農協のガソリンスタンドの閉鎖である。その時、立ちあがったのが農協OBたちで、村民から出資を募り、一般社団法人「振興センターやすおか」を設立して運営。その法人は、村の福祉バス、スクールバスなどの運行管理も村から受託して自立している。いま一つは、学校統廃合後の跡地を活用した農業。隣市の民間企業と連携し、株式会社「ヌーベルファーム泰阜」を設立し農業に取り組んでいる。これ以外にも、貸工場を村が建設し、地元企業がそれを使って40人を雇用、創立20年近くになろうとしている。これらの事例は、まさに目の前の課題を前に、地に足のついた最善策を自分たちが考えたということである。山村の生活力、人間力、そして知恵がある限り、この村が消滅していくとは考えられない。

松島村長といえば、2009年11月28日に開催した人間文化研究所5周年記念シンポジウムが思い出される。同年12月3日のレポートに書いたが、松島村長に「安心の村は自律のむら」をテーマに講演してもらった。その後、私がコーディネーターをつとめ「持続可能な社会」をテーマにパネルディスカッションをおこなった。母の死の直後で疲れ果てていたが、松島村長のおかげで無事にシンポジウムをおえることができた。

(2015年1月28日)

